

(別紙)

成果の説明書

(氏名) 井上 真由美	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>わたしが平成 24 年度に進めてきた研究の内容は以下のとおりである。</p> <p>戦後日本を代表する経営者の一人に出光興産を創業した出光佐三氏があげられる。出光氏は、戦前においては、製品開発に力を注いで大口顧客の獲得に成功し、戦後には自前の精油所とタンカーをもち、石油化学工業に進出し、さらには販売体制を拡充して「大地域小売業」を実践した。このような彼の事業活動について、先行研究はそれを先進的・革新的というふうの特徴づけているが、その見方は限定的であると考えられる。なぜなら、彼の思想や組織運営法に少しでも着目すれば、そこには「士魂商才」「家族主義」「禅の精神」などの観念がひそんでいることに気付くからだ。そしてこうした観念を彼が形成するにいたった歴史的背景を探れば、明らかに出光氏は、明治末から大正期にかけて蔓延していた投機的経営手法に対する強烈な反発心を持っていた。したがって、先行研究における革新性ということに加えて、出光氏が、国民経済の望ましいあり方（秩序）とでもいうべきものを追求してきた可能性が検討されなければならないと思う。こうした問題意識の下、今年度は次のような研究を行った。</p> <p>① 出光氏の事業活動のあり方に大きな影響を与えた条件を考察した。ただしそれは、<エンジェルがいたか否か>とか、<利用可能な各種の資源があったか否か>というような“客観的条件”のことではなく、<どういう方向性で事業活動を行うのか>、換言すれば<どういう生き方をするのか>という彼の決断に影響を与えた“主体的条件”についての考察である。さしあたり、わたしは、神戸高等商業学校在学中に出光氏が接した教育者たちの主張を詳細に検討することによって、この課題に接近しようと試みた。</p> <p>② 上述した出光氏の反発とは、日露戦争後の大阪を中心とした経済界に対する反発のことである。彼は神戸高商の学窓から、当時の経済界のあり方を批判的に見ていた。では、その実相はどのようなものであったのだろうか。当時、その活動によって名を知られた経済人を取り上げ、彼らの活動を観察し、そしてその特徴をつかむことによって、この課題が解かれるのではないかとわたしは考えた。そこで、まずわたしは、著名な数名の相場師の活動と彼らの生き方を確認した。次に、相場師ではなくれっきとした事業の経営者ではあるが、その経営手法が投機的であったと考えられる存在を取り上げ、同様に彼らの事業活動と生き方について考察した。そして、これは現在進行中なのだが、あるユニークな存在、すなわち相場師をやめたあと、国民経済発展のための社会インフラ事業に尽力した経済人に着目し、彼らの転機が一体どのようにやってきたのかを探っている。</p> <p>なお、わたしは、上記①、②の研究のアウトラインを、平成 24 年 7 月 7 日に開催さ</p>	

れた「企業家研究フォーラム年次大会」（於：大阪大学）で報告した。またそれぞれについての論文を執筆し、それらは次年度に投稿される予定である。

2 その他の事項